

2019年度 休眠預金活用事業

# 「当事者主体の再犯防止・社会復帰支援事業」 事後評価報告書

【実行団体】 特定非営利活動法人のわみサポートセンター



人はみな、  
生かされて  
生きてゆく。



更生保護ネットワーク

【資金分配団体】 更生保護法人 日本更生保護協会

資金分配団体事業名 | 安全・安心な地域社会づくり支援事業

事業の種類 | 草の根活動支援事業

## 1. 事業概要 ..... p.1

実行団体概要 / 助成事業概要  
助成事業ロジックモデル

## 2. 事後評価実施概要 ..... p.4

- (1) 実施概要
- (2) 実施体制

## 3. 事業の実績 ..... p.7

- 3-1 インプット
- 3-2 活動詳細と支援事例
- 3-3 活動とアウトプットの実績
- 3-4 外部との連携の実績

## 4. アウトカムの分析 ..... p.18

- 4-1 アウトカムの達成度
  - (1) アウトカムの計画と実績
  - (2) アウトカムの達成度についての評価
- 4-2 事業の効率性
- 4-3 成功要因・課題

## 5. 考察 ..... p.26

事業全体を振り返っての考察  
(その他深掘り検証項目 / 波及効果 / 提言 / 知見・教訓)

## 6. 結論 ..... p.27

- 6-1 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価
- 6-2 事業実施の妥当性

## 7. 資料 ..... p.28

# 1. 事業概要

## 実行団体

### 特定非営利活動法人のわみサポートセンター

## 団体概要

生活困窮者や就職困難者のための食堂、便利屋、リサイクルショップと複数事業を運営。毎年100名以上の社会復帰支援を行っており、この中には出所者も相当数いる。2019年より当事者が当事者を支援する「トライアゲイン」活動を開始し、出所から住まい、生活、仕事へと社会復帰ができるように伴走型支援を行っている。



## 解決を目指す 社会課題

日本の出所者の再犯率は59.5%、社会に帰住先がない満期出所者は53.1%。出所者の多くは孤立し、偏見や差別を受けるなど社会から排除され、人に頼ることができず、手持ち金もわずかで、住まいや仕事がない為に再び罪を犯してしまう方が多い。帰住先がない出所者等はこれまで更生保護施設が収容保護してきたが、なお行き場のない者が多数に上る。法務省では平成23年度から「緊急的住居確保・自立支援対策」による住居の確保の施策を実施しているが、まだ十分ではない。

## 助成事業

## 事業名

### 当事者主体の再犯防止・社会復帰支援事業

## 事業概要

愛知県・岐阜県の刑事施設からの出所者受け入れに際し、出所前に面接に行き、当事者が支援者として活動できることを伝え、住まいや仕事などの希望を聞き、個別支援計画書を作成する。安心して出所できる体制と実際に必要な支援が受けられること、また当事者同士の交流や助け合いができる場所があることで、再犯防止と社会復帰を実現する。

実施期間 | 3年 (2020.3~2023.3)

対象地域 | 愛知県・岐阜県

支援対象 | 刑余者、帰住先のない出所者

## 事業終了時の 展望 (当初案)

立ち直りを支える上で最も大事なことは、孤独にならないネットワークを作ること。元当事者が支援者となって当事者を支えるサイクルができれば、支援の輪が広がり、より多くの人々が助けられる。助成金終了後は、支援した当事者全員が「トライアゲイン」の会員となり、自分が社会復帰できたことを忘れずに年会費(5000円)を納めるようになれば、持続可能性はある。制度化する場合は刑務所内に社会復帰支援課を作り事業を実施する、または行政から社会復帰支援事業を委託事業として行うことなどが考えられる。

中期  
アウトカム

愛知県・岐阜県において、刑余者や出所者が自分らしくいきいきと社会復帰でき、再犯する必要のない地域・社会になる。

短期  
アウトカム

01 帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、二度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。

02 元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。

03 支援を受けた刑務所出所者等が、(のわみ相談所の、又は出所者専用の)シェルターから自立する

04 団体の組織基盤について、身寄りなく帰住先もない刑務所等出所者を継続して支援できるような、安定した状態になる

アウトプット

0101 帰住先のない刑務所等出所者が、出所前に支援者と面会し、出所日には迎えに来てもらい、住まいと居場所、仕事と仲間を得られる状態になる。

0201 元当事者が支援者として、他の支援者と一緒に出所者を支援する活動に参加する

0301 シェルターからアパート等への自立支援を行う

0401 団体の組織基盤の強化に取り組む

活動

■出所前に面接を行い支援計画を策定 ■受け入れ体制整備 ■シェルター入居後の各種手続き支援、就労支援 ■支援者が定期的にシェルターを訪問し当事者との接触を維持する ■支援経過記録表を作成し自立支援を行う

支援者としての適正がある元当事者がグループミーティングで世話人を担い、当事者と関係を築き身の回りの世話をサポートする。

就労支援、金銭管理の確認と貯蓄の助言、就労不能の場合は生活保護の申請援助を行い、シェルターから自立する際に必要な支援を行う。

非営利評価センターの「ガバナンス認証」を実施、助言を受けることで自団体の課題を理解し課題解決に取り組む。組織基盤強化に必要な場合は、外部専門家の助言を受け改善を図る。

## 2. 事後評価 実施概要

### (1) 実施概要

#### ① どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定したか

帰住先のない、出所者がホームレスになることなく、安心して住める場所を提供。生活に必要な物品は全て提供し、食料や食事も無料で提供され、社会復帰に向けてお金の心配なく生活できる環境。支援者が毎日訪問し、働く意欲のある人には仕事の情報提供をして面接支援等の就労支援を行う。アルコール依存や薬物依存のある人には断酒会への参加をすすめる。

#### ② どんな調査で測定したのか

短期 アウトカム 01の評価	<b>01</b>	帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、2度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。
	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	<b>【 定性調査 】</b> 支援記録 2022年4月～11月 支援対象者(9名) 定性分析
	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	<b>【 定量調査 】</b> アンケート調査（主な項目は～どのような支援が再犯防止に有効だったかを導き出す） 2022年4月～11月事業の対象となった9人に対して調査を行い、回収者数9人（回収率100%） 支援対象者(9名) 定量分析
	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	<b>【 定性調査 】</b> 直接観察 2022年4月～11月 事業の対象となった9人のうち、最も特徴的な変化を示した6人を対象にした。 調査から得られたエピソードをロジックモデルの枠組みで分析した。

## ② どんな調査で測定したのか

短期 アウトカム 02の評価	<b>02</b>	元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。
	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	【 定性調査 】 インタビュー 2022年11月 支援者となった元当事者 定性分析
短期 アウトカム 02の評価	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	【 定量調査 】 支援記録 2022年4月～2022年11月 支援者となった元当事者や刑務所出所者等支援活動に参加した人 定量調査
	<b>03</b>	支援を受けた刑務所出所者等が、（のわみ相談所の、又は出所者専用の）シェルターから自立する
短期 アウトカム 03の評価	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	【 定量調査 】 支援記録 2022年4月～11月 支援を受けた刑務所出所者等 定量調査
	<b>04</b>	団体の組織基盤について、身寄りなく帰宅先もない刑務所等出所者を継続して支援できるような、安定した状態になる
短期 アウトカム 04の評価	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	【 定量調査 】 グループディスカッション 2022年12月 事業責任者、副責任者、経理担当者、支援者3名、当事者支援者1名 計7名 意見の集約から分析した。
	(1) 調査方法 (2) 調査実施時期 (3) 調査対象者 (4) 分析方法	【 定性調査 】 支援者インタビュー 2022年12月 事業責任者、副責任者、経理担当者、支援者3名、当事者支援者1名 計7名 調査から得られたエピソードをロジックモデルの枠組みで分析した。

### ③ 調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

- ・支援記録等から得た調査結果について、白書等の統計資料と比較して、価値判断を行った。

## (2) 実施体制

内部／外部	評価担当役割	氏名	団体・役職
内部	分析担当	三輪憲功	事業責任者
内部	調査担当	鈴木美雪	事業副責任者
内部	データ集約担当	高木悠子	経理担当
内部		宝満正一	支援者
内部		神田亮	支援者
内部		三里美晴	支援者
内部		高勝義	支援者(医師)
内部		山本正一	当事者支援者

## 3. 事業の実績

### 3-1 インプット（主要なものを記載）

項目	内容・金額	
(1) 人材 (主に活動していたメンバーの人数や役割等)	内部：合計6人（事業担当者4人～5人、経理担当2人） 外部：支援ネットワーク	
(2) 資機材（主要なもの）	車、パソコン	
(3) 経費実績 助成金の合計		
① 契約当初の計画金額	合計 8,702,000 円	事業費：8,492,000円（内訳 直接事業費：8,492,000円 / 管理的経費：0円） 評価関連経費：210,000円 コロナ対応緊急支援追加額：0円（内訳 直接事業費：0円 / 管理的経費 0円）
② 実際に投入した金額と種類	合計 11,672,000 円	事業費：8,492,000円（内訳 直接事業費：8,492,000円 / 管理的経費：0円） 評価関連経費：210,000円 コロナ対応緊急支援追加額：2,970,000円（内訳 直接事業費：2,970,000円 / 管理的経費：0円）
(4) 自己資金		
① 契約当初の自己資金の計画金額	合計 2,123,000 円	
② 実際に投入した自己資金の金額と種類	合計 2,123,000 円	
③ 資金調達で工夫した点		

### 事業を発想したきっかけ

2017年に名古屋の「共同連」の会合でトライアゲインの金子さんに出会い、帰住先のない刑務所出所者の住まいと仕事の確保を試行錯誤しながらむしゃらに活動していることを知り、のわみと一緒に活動しようと意気投合し、資金のないトライアゲインに専用の車とガソリン代等を支援し、2018年は民間の助成金を確保し、活動が広がり、本助成金を獲得することができ、いよいよこれからと言うとき、金子さんは病に倒れ、旅立ってしまった。残されたメンバーは金子さんの遺志を受け継ぎ、助成事業を展開することになった。

### シェルター事業

#### 刑務所出所後の住まいの提供と自立生活に向けた支援



- ・ シェルター事業の目的は、帰住先のない出所者等を一時的に住ませ、そこで、再犯防止と社会復帰のための様々な支援(食料や衣類、日用品の支援、住所変更や年金の手続き、生活保護の申請等同行支援、就労支援等)を行う。滞在期間は最大三ヶ月でその間に次の住居を探し、転居支援を行う。
- ・ 次の住居の確保として、のわみが連携している良心的大家さんの所か、民間アパート、公営住宅、施設、住込みの仕事など。転居の際は、不足がないように備品の支給を行う。
- ・ 働く意欲のある人には積極的に就労支援を行う。・ 就労が難しい方には生活保護を申請する。

### 支援事例

**事例1** 68才のFTさん、2020年3月末の受け入れの翌日から住所変更、車の免許の更新、年金の受け取り、通帳の開設、就職活動など積極的に行うが、短気でおっちょこちょい、早とちりが多く、冷静な判断力が欠け、短絡的で採用されてもすぐにやめてしまう傾向があり、途方に暮れていた所、たまたまのわみのフードバンクの引き取り運転手を探していたのでお願いしたら続けて働けるようになり今も元気で頑張っている。

**事例2** 71才のKSさん、2022年3月31日に出所し、専用シェルターに3ヶ月生活。更生を誓い、日々生活するが、同じアパートの住人と仲良くなり、一緒に飲みに行くようになり、生活保護費だけでは足りず、度々お金を借りに来ていた。そのたびに表面的には頑張っていることをアピールし、なんとか取り繕おうとしていた。3ヶ月後民間アパートに入居し、何かしないとイケないと思い、会社の清掃のアルバイトができるようになった。その後はお金を借りに来ることもなく、落ち着いて生活している。



## 元当事者の支援者の活動 | 当事者が当事者を支える



以前会社を経営していた62才のYSさん。薬物依存で満期出所してシェルターに入居してきた直後は、精力的に社会復帰に向けて活動していたが、ある日突然鬱状態になりひきこもりに。回復した頃には、免許の更新が期限切れでできなくなり、さぞや落胆していると思ったが、めげずに就職活動するなど再び元気になる、人の世話も得意なため、のわみの便利屋やフードバンクで働きだし、みんなの相談相手として頼りにされていたため、当事者支援者に推薦するとすんなり受け入れ、働きすぎかなと思えるほど、毎日できることを精一杯してくれるようになった。

その後ガンが見つかり1ヶ月半闘病生活を送ったが、今ではスーパーマンのように元気で当事者の為に寄り添い支援をしてくれています。当事者が支援者になる意義としては、当事者の気持ちがわかる、失敗は一時的で継続するものではない、何度でもやり直せると見本を示すことができる。全ては自分次第で良くも悪くもなる、など身をもって示し、導くことができる。

ある日の様子として、YSさんは朝初めてEさんと駐車場で待ち合わせ、一緒にEさんと仕事に行き、夕方のわみに帰ってきて仕事の報告をした。Eさんは人間不信で繊細なため、仕事することに躊躇していたが、YSさんと一緒に仕事に打ち込むことができ、生活費を稼ぐことができた。

YSさんはいつも当事者が一人で仕事ができるようになるまで一緒に仕事をします。また高齢者には当然のように一緒に買い物や用事に付き添います。

### 当事者支援者の声（62歳・男性）

「幼い頃母と親戚の家で育ったせいか、わがままを言うことができず、相手の気持ちに添って行動するのが当たり前だったため、自分より相手を優先する傾向が強くあり、見返りも求めないように自分を無意識に抑えてきました。

その為、ある日突然もう一人の自分が鬱状態になり、ひきこもりになるのかなと思います。二重人格かなと思いますが、そうやってうまくバランスを取っていたと思います。薬物で捕まった時も無意識でしたが、もう一人の自分が勝手にやってしまったと説明するのも良くないと思い、罪を認めました。

のわみと出会って、周りの皆さんがとても親身に自分の事を思ってくれるので、期待に応えたいと頑張りすぎてしまっていますが、精一杯やらない気が済まないのだけやっています。鈴木さんがすごく優しく気を使ってくれるので、何でも言いたいことが言えるようになりました。支援者になろうと思ったのは鈴木さんが忙しすぎるので助けてあげたいと思ったのと、いろいろと頼んでくるので、嫌と言えず、持ち前のサービス精神で期待以上の仕事をしてしまい、ますます頼られるという悪循環にはまってしまったからです。

自分は人の気持ちがすぐわかるので、支援者に向いているかもしれません。そして何でも相談でき、自然体でいられる仲間がたくさんいるので、もう一人の自分が出てくる必要がないのかなと思うし、薬物依存になる必要もないのでこの仕事は自分の更生にとっても役立っていると思います。」

ロジックモデル

【当事者主体の再犯防止・社会復帰支援事業】

中期  
アウトカム

愛知県・岐阜県において、刑余者や出所者が自分らしくいきいきと社会復帰でき、再犯する必要のない地域・社会になる。

短期  
アウトカム

01

帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、二度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。

02

元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。

03

支援を受けた刑務所出所者等が、(のわみ相談所の、又は出所者専用の)シェルターから自立する

04

団体の組織基盤について、身寄りなく帰住先もない刑務所等出所者を継続して支援できるような、安定した状態になる

アウトプット

0101

帰住先のない刑務所等出所者が、出所前に支援者と面会し、出所日には迎えに来てもらい、住まいと居場所、仕事と仲間を得られる状態になる。

0201

元当事者が支援者として、他の支援者と一緒に出所者を支援する活動に参加する

0301

シェルターからアパート等への自立支援を行う

0401

団体の組織基盤の強化に取り組む

活動

■出所前に面接を行い支援計画を策定 ■受け入れ体制整備 ■シェルター入居後の各種手続き支援、就労支援 ■支援者が定期的にシェルターを訪問し当事者との接触を維持する ■支援経過記録表を作成し自立支援を行う

支援者としての適正がある元当事者がグループミーティングで世話人を担い、当事者と関係を築き身の回りの世話をサポートする。

就労支援、金銭管理の確認と貯蓄の助言、就労不能の場合は生活保護の申請援助を行い、シェルターから自立する際に必要な支援を行う。

非営利評価センターの「ガバナンス認証」を実施、助言を受けることで自団体の課題を理解し課題解決に取り組む。組織基盤強化に必要な場合は、外部専門家の助言を受け改善を図る。

## 3-2 活動とアウトプットの実績

アウトプット 0101	アウトプット   帰住先のない刑務所等出所者が、出所前に支援者と面会し、出所日には迎えに来てもらい、住まいと居場所、仕事と仲間を得られる状態になる。 目標達成時期   2023年3月		
主な活動（概要）   ■出所前に面接を行い支援計画を策定 ■受け入れ体制整備 ■シェルター入居後の各種手続き支援、就労支援 ■支援者が定期的にシェルターを訪問し当事者との接触を維持する ■支援経過記録表を作成し自立支援を行う			
指標	初期値	目標値	実績値
①支援を受けた刑務所出所者数	①年間5人程度	①年間24人程度	①総数48名 2020年度 28人 【目標値達成】 2021年度 10人 【目標値未達成】 2022年度 10人 【目標値未達成】
②支援者との、定期的な接触・面談の回数が確保されている	②年間3人程度	②毎日シェルターを訪問し様子を把握する。少なくとも2日に1回は、事務所ないしはシェルターで本人と話をしている。（接触状況が記録上確認できる）	②総数48名 【いずれも初期値より増加】 2020年度 21人 75% 2021年度 8人 80% 2022年度 9人 90%
③支援内容・面談内容について、その都度記録を取れている	③年間2人程度	③支援内容、面談内容について、きちんと記録が取れている。	③総数48名 【いずれも初期値より増加】 2020年度 21人 79% 2021年度 8人 80% 2022年度 10人 100%

<b>アウトプット 0201</b>	<b>アウトプット   元当事者が支援者として、他の支援者と一緒に出所者を支援する活動に参加する。</b> 目標達成時期   2023年3月		
<b>主な活動（概要）   支援者としての適正がある元当事者がグループミーティングで世話人を担い、当事者と関係を築き身の回りの世話をサポートする。</b>			
<b>指標</b>	<b>初期値</b>	<b>目標値</b>	<b>実績値</b>
<p>①支援を受けた刑務所出所者のうち、支援活動への参加について、スタッフ側から声を掛けた人数</p> <p>②当事者支援者（候補者含む）に対して、倫理観の育成、支援スキルの獲得等、必要な研修が実施されている</p>	<p>①今まで10年間で50人位の刑務所出所者を受け入れたが、そのうち現在支援者として活動している人は4人程度</p>	<p>①出所者の適性（性格、能力、倫理観、本人の関心等）を見極めながら、支援者になれる可能性がある人と判断した人については、その全員に声をかけている</p> <p>②当事者支援者に対して行った、学びの機会、研修等が十分に行われている（日程・内容）</p>	<p>①支援を受けた刑務所出所者の総数48人</p> <p>2020年度 5人 18%</p> <p>2021年度 1人 10%</p> <p>2022年度 5人 50%</p> <p>2022年6月1日12時半～13時(支援の在り方について)</p> <p>6月5日15時～15時半(支援の在り方について)</p> <p>6月13日16時～16時半(支援の在り方について)</p> <p>6月19日11時～11時半(支援の在り方について)</p> <p>6月23日12時半～13時(支援の在り方について)</p> <p>6月24日10時～10時半(支援の在り方について)</p> <p>6月25日13時～13時半(支援の在り方について)</p> <p>6月26日10時半～11時(支援の在り方について)</p> <p>6月29日14時～14時半(支援の在り方について)</p> <p>6月30日14時～14時半(支援の在り方について)</p> <p>7月15日12時半～13時(支援の在り方について)</p>

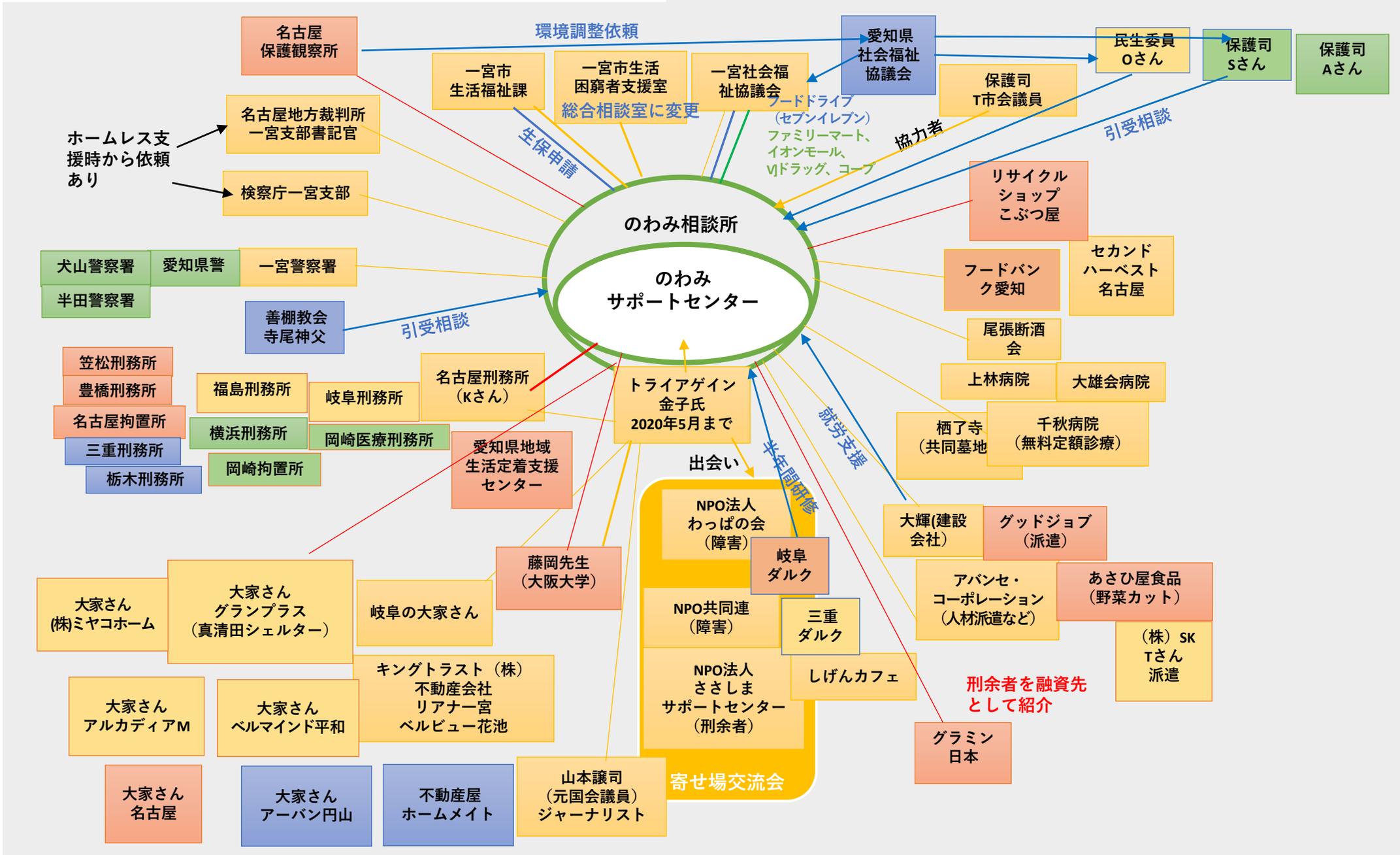
アウトプット 0301	<b>アウトプット   シェルターからアパート等への自立支援を行う（2022年4月追加）</b> 目標達成時期   2023年3月		
主な活動（概要）   就労支援、金銭管理の確認と貯蓄の助言、就労不能の場合は生活保護の申請援助を行い、シェルターから自立する際に必要な支援を行う。			
<b>指標</b>	<b>初期値</b>	<b>目標値</b>	<b>実績値</b>
①シェルターからアパート等への自立に向けた支援を行った人数  ②自立に向けた具体的な支援が行われている	①②シェルターからの自立を意識した支援をしていない	①支援につながった全員  ②当事者の希望に添った「具体的な」自立支援が行われている <b>【履歴書の作成支援、面接支援（練習等）、就労関係機関（HW、愛知県就労支援事業者機構等）へのつなぎ、協力的雇用主の紹介、生活保護の申請支援、自立先確保支援（不動産屋への同行、物件の下見等）】</b>	①総数48人のうち、 2020年度 18人 64% 2021年度 8人 80% 2022年度 5人 50%  ②総数48人のうち、 2020年度 26人 93% 2021年度 9人 90% 2022年度 9人 90%

アウトプット 0401	<b>アウトプット   団体の組織基盤の強化に取り組む。</b> 目標達成時期   2023年3月		
	主な活動（概要）   非営利評価センターの「ガバナンス認証」を実施、助言を受けることで自団体の課題を理解し課題解決に取り組む。 組織基盤強化に必要な場合は、外部専門家の助言を受け改善を図る。		
指標	初期値	目標値	実績値
①組織上の課題を団体内がしっかりと把握できている (経理・人事・労務関係等含む)	①不明	①組織上の課題を外部に説明できる状態に整理できている	①当NPOは理事3名監事1名で運営し、理事長は便利屋とリサイクル部門の責任者、他の理事は事務局の責任者と外国人問題の責任者を担っている。母体が任意団体ののわみ相談所であり、のわみグループの1員として、主に中間的就労支援を行っている。組織上の課題としては人材不足のため、今回の助成事業でも事業の実行者が経理も行い、途中から経理担当の職員を雇用した。また、監事が支援者に携わり、非営利評価センターから指摘を受けた。今後は理事や職員を増やし、役割分担をして、情報の共有や透明性を高めていきたい。
②組織を強化する意思を持って、課題の改善に取り組んでいる	②不明	②外部からの支援を受け入れて、具体的な改善が進んでいる	②2022/2/25 非営利評価センター「グッドガバナンス認証」申込み 2022/3/22 ZOOM説明会、日程調整 2022/6/21 自己評価チェックシート、添付書類の送付 2022/6/28 ZOOMでヒアリング 2022/7/27 27項目のアドバンス評価の内以下の6項目で改善助言が有、改善された後、再度評価を受けることになった。



### 3-4 外部との連携の実績 【事業3年目のエコマップ：2022年9月時点】

■ エコマップ色分け  
 助成事業開始前 黄色 → 1年目 赤色 → 2年目 青色 → 3年目 緑色



## 外部との連携の実績

### ■ 1年目

- ・名古屋刑務所河合さん－金子さんの時から知り合いだった名古屋刑務所の河合さんが引き続き依頼あり。
- ・豊橋刑務所高島さん－DV被害者支援民間シェルターの情報を知らせる会でつながり、依頼。
- ・名古屋拘置所－依頼があったが、出所の当日再犯して再逮捕。
- ・笠松刑務所－当事者支援者のMさんの出身地でもあり、挨拶に行く。
- ・名古屋保護観察所、愛知県地域定着支援センター－重度の統合失調症のWさんの受け入れ先として打診があり、シェルターに入居。
- ・大阪大学藤岡先生－島根あさひ社会復帰促進センターで金子さんが出合い、金子さんを偲ぶ会で講演依頼し、つながる。
- ・名古屋の良心的大家さん(田中さん)－のわみの事をテレビで知り、名古屋に住みたい刑余者の住まいを格安で提供してくれる。
- ・岐阜ダルク－のわみの事をネットで知り、半年間Kさんが研修に来る。
- ・グラミン日本－創立当初わっぱの会の紹介で刑余者や困窮者、外国人の企業の融資先として勉強会の場を提供し、包括的連携協定を結びつながる。
- ・グッドジョブ(派遣会社)－わっぱの会からの紹介で、住まいや支援付きの派遣会社としてつながる。
- ・アサヒヤ食品－一宮市役所の紹介で、就職困難者の就労先として営業に来られ、つながる。
- ・フードバンク愛知－2019年6月に設立され、セカンドハーベスト名古屋の紹介で2020年度よりのわみに大量の食品を供給してくれるようになった。
- ・リサイクルショップコブツヤ－ジモティーで知り合い、格安で家電を供給してくれることになった。

### ■ 2年目

- ・膳棚教会寺尾神父－のわみの活動を知り、自身が文通している受刑者にのわみを紹介。
- ・三重刑務所－一宮出身の受刑者が度々のわみに手紙を寄こし、仮釈放の帰住先をのわみにしたいと依頼しつながる。
- ・栃木刑務所－一宮出身の受刑者が仮釈放の帰住先をのわみにしたいと依頼しつながる。
- ・良心的大家さんアーバン円山荘－出所者専用のアパートシェルターとして契約してくれる。
- ・良心的不動産屋ホームメイト－保証審査が通らない刑余者に対し、粘り強く物件を紹介してくれ入居ができるようになる。
- ・愛知県社会福祉協議会－食品や物品の受け入れ先としてのわみを紹介してくれる。

### ■ 3年目

- ・愛知県警、犬山警察署、半田警察署－のわみの活動を知り、外国人の犯罪被害者の一時避難所としてシェルターを利用。
- ・横浜刑務所－のわみの活動を知り、受刑者より手紙が来る。
- ・岡崎医療刑務所・岡崎拘置所－名古屋刑務所からの依頼で出所後の帰住先として依頼される。
- ・保護司浅井さん－子ども食堂でつながり、のわみの活動に協力してくれる。
- ・保護司住藤さん－三重刑務所と栃木刑務所から仮釈放の受け入れ先としてのわみを紹介されつながる。

# 4. アウトカムの分析

## ロジックモデル

## 【当事者主体の再犯防止・社会復帰支援事業】

### 中期 アウトカム

愛知県・岐阜県において、刑余者や出所者が自分らしくいきいきと社会復帰でき、再犯する必要のない地域・社会になる。

### 短期 アウトカム

01

帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、二度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。

02

元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。

03

支援を受けた刑務所出所者等が、(のわみ相談所の、又は出所者専用の)シェルターから自立する

04

団体の組織基盤について、身寄りなく帰住先もない刑務所等出所者を継続して支援できるような、安定した状態になる

### アウトプット

0101

帰住先のない刑務所等出所者が、出所前に支援者と面会し、出所日には迎えに来てもらい、住まいと居場所、仕事と仲間を得られる状態になる。

0201

元当事者が支援者として、他の支援者と一緒に出所者を支援する活動に参加する

0301

シェルターからアパート等への自立支援を行う

0401

団体の組織基盤の強化に取り組む

### 活動

■出所前に面接を行い支援計画を策定 ■受け入れ体制整備 ■シェルター入居後の各種手続き支援、就労支援 ■支援者が定期的にシェルターを訪問し当事者との接触を維持する ■支援経過記録表を作成し自立支援を行う

支援者としての適正がある元当事者がグループミーティングで世話人を担い、当事者と関係を築き身の回りの世話をサポートする。

就労支援、金銭管理の確認と貯蓄の助言、就労不能の場合は生活保護の申請援助を行い、シェルターから自立する際に必要な支援を行う。

非営利評価センターの「ガバナンス認証」を実施、助言を受けることで自団体の課題を理解し課題解決に取り組む。組織基盤強化に必要な場合は、外部専門家の助言を受け改善を図る。

## 4-1 アウトカムの達成度

### (1) アウトカムの計画と実績

短期アウトカム 01		<p>帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、2度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。</p> <p>目標達成時期   2023年3月</p>	
指標	初期値 ／ 初期状態	目標値／目標状態	アウトカム発現状況（実績）
①継続的に支援を受けている人のうち、その後「いきがいややりがい」を感じられるようになった人の割合	①40%	①90%	①89% <b>【目標おおむね達成】</b> アンケート調査で、「支援を受けて、「いきがい」や「やりがい」を感じられるようになりましたか？」の設問に、「とても感じている」「まあ、感じている」と答えた人 8人/9人
②継続的に支援を受けている人のうち、経済的に自立した人の割合	②10%	②90% (生活保護、年金等も可、支援開始後3ヶ月時点、その後も見守り支援を継続)	②89% <b>【目標おおむね達成】</b> (8人/9人)(アンケート結果)
③支援を受けた人の再犯率	③30%	③10%	③平均 21% <b>【目標未達成】</b> 内訳：2020年度 13% 2021年度 20% 2022年度 30% (2022年4月～2023年2月で対象者10人のうち再犯が3人) 参考：令和3年度版再犯防止推進白書では、2020年（令和2年）の再入受刑者のうち、出所から3月未満で再犯に至った満期釈放者は15.3%、出所から2年未満で再犯に至った満期釈放者は62.2%である。 単純比較はできないかもしれないが、目標は未達成であっても、何も支援を受けない状態と比べると再犯率は低く抑えられていると考えられる。
④支援を受けた人のうち、気軽に何でも話せる友人ができたり、支援者と対話を続けている人の割合	④30%	④70%	④ <b>【目標達成】</b> （3年目を参照） 2020年度 37% (未達成) 2021年度 22% (未達成) 2022年度 100% (達成)→全員が、「友人ができた」または、支援者に相談していると回答

短期アウトカム  
02

元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。  
目標達成時期 | 2023年3月

指標	初期値 ／初期状態	目標値 ／目標状態	アウトカム発現状況（実績）
①元当事者の支援者のうち、支援をすることで「生きがいややりがい、使命感」を抱くようになった人の人数及びその事例	<p>① 4人(事例)</p> <p>■1-1.7年前に刑務所を出所し、いろいろな人と関わるなかで帰宅先のない人の受け入れがしたいと思っていた所2年前にのわみと出会い、支援者として活動することが可能になった。</p> <p>■1-2.. 2年前に出所後転々とし、1年半前にのわみに相談に行き、支援者として活動することになった。</p> <p>■1-3.1年前福島刑務所を出所する時、トライアゲインの存在を知り、世話になり、恩返しとして支援者になった。</p> <p>■1-4.半年前に出所し、世話になった恩返しとして料理の腕を生かして子ども食堂や各種イベントで料理人としてまた相談相手として活躍。</p>	①支援者になった者のうち90%以上を目標とする。	<p>①100%(10人/10人) 【目標達成】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Fさん (フードバンクのわみの配達や引き取りの仕事に従事)</li> <li>2. Aさん (リサイクルショップのわみの店番に従事)</li> <li>3. M.Kさん(子ども食堂やシェルターの料理に従事)</li> <li>4. Yさん(当事者支援者に従事)</li> <li>5. M.Sさん(女性・シェルター内で世話役として従事)</li> <li>6. K.Tさん(シェルター内で世話役として従事)</li> <li>7. Hさん(シェルター内で世話役として従事)</li> <li>8. K.Kさん(シェルター内で世話役として従事)</li> <li>9. M.Sさん(シェルター内で調理に従事)</li> <li>10. K.Tさん(フードバンク倉庫で配布のボランティア)</li> </ol>
②支援者となった元当事者の再犯率	② 0人	② 0%	②10%(1人/10人中) 万引き常習犯だった。【目標未達成】
③支援を受けた人のうち、刑務所出所者等支援活動に参加した人の割合(短期アウトカム1から移転)		③20%(主に同行支援だが、当事者の見守り活動、個別の相談活動、各種ボランティア活動の参加も含む)	③21% (10人/48人中) 【目標達成】

短期アウトカム  
03

支援を受けた刑務所出所者等が、（のわみ相談所の、又は出所者専用の）シェルターから自立する。【2022年4月に新規設定のため、それまでは参考数値】  
目標達成時期 | 2023年1月

指標	初期値 ／ 初期状態	目標値 ／ 目標状態	アウトカム発現状況（実績）
<p>①支援を受けた刑務所出所者等のうち、実際にシェルターから自立できた（アパート等に転居した）人の数（転居先はのわみのシェルター・アパート以外）</p> <p>②シェルターからアパート等への自立に至るまでの期間</p>	<p>①シェルターからの自立を意識した支援をしていない</p> <p>②シェルターからアパート等への自立に至るまでの期間を意識していない。</p>	<p>①支援を受けた人の70%</p> <p>②のわみの支援を開始してから3ヶ月から4ヶ月で自立できている。 100%</p>	<p>①【目標未達成】（3年目参照） 2020年度 61%（17人/28人） 2021年度 90%（9人/10人） 2022年度 44%（4人/9人）</p> <p>②【目標未達成】（3年目参照） 2020年度 61%（17人/28人） 2021年度 90%（9人/10人） 2022年度 44%（4人/9人）</p> <p>※①②ともに2020年度及び2021年度については参考値</p>

短期アウトカム 04	団体の組織基盤について、身寄りなく帰宅先もない刑務所等出所者を継続して支援できるような、安定した状態になる。 目標達成時期   2023年1月		
指標	初期値 ／ 初期状態	目標値 ／ 目標状態	アウトカム発現状況（実績）
①非営利評価センターの「グッドガバナンス認証」の認証を得る	①認証なし	①事業終了時まで「グッドガバナンス認証」を得ている	<p>【目標未達成】</p> <p>2022/2/25 非営利評価センター「グッドガバナンス認証」申込み  2022/3/22 ZOOM説明会、日程調整  2022/6/21 自己評価チェックシート、添付書類の送付  2022/6/28 ZOOMでヒアリング  2022/7/27 27項目のアドバンス評価の内以下の6項目で改善助言が有、改善された後、再度評価を受けることになった。</p> <p>&lt;改善項目&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.定款の内容と実際の事業内容に齟齬があるので定款変更すること。 ⇒定款変更について案を策定し、理事会での承認待ち</li> <li>2.これまでの相談記録をデータベース化し、業務マニュアルを策定すること。 ⇒データベース化と業務マニュアルを策定中</li> <li>3.人材や後継者の育成など将来についての事業計画も含め、中長期ビジョンを策定すること。 ⇒中長期ビジョンについて検討中</li> <li>4.積極的な情報発信と寄付の受け入れ体制を整備すること。 ⇒ファンドレイジングやクラウドファンディングについて検討中</li> <li>5.監事がサポートセンターと業務委託を契約しているため、第三者制を担保するため、もう一人監事を選任すること。 ⇒現在選任中だが適任者がいない</li> <li>6.個人情報保護規定の策定 ⇒策定済</li> </ol>

## (2) アウトカム達成度についての評価

事業の短期アウトカムの評価	左記のように評価した理由
<input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回って達成できている	達成できたものは、①当事者の生きがいややりがい／②経済的な自立／③当事者支援者になった人の生きがいややりがい／④当事者支援者の再犯率／⑤ボランティア等に参加した人の割合の5項目。
<input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値が達成できている	未達成だったのは、①当事者の再犯率10%⇒3年間の平均が21%（目標未達だが、支援がない場合より低く抑えられている）／②継続的な対話や交友関係ができた人の割合70%⇒3年間平均53%／③シェルターからアパート等への自立支援70%⇒3年間平均65%／④のわみの支援を開始してから3ヶ月から4ヶ月で自立できている。100%⇒3年間平均65%／⑤事業終了時まで「グッドガバナンス認証」を得ている⇒未達成の5項目だった。
<input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できている	全体として達成率は50%だった。
<input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成はできなかったと自己評価する	

### 4-2 事業の効率性

事業実施のためのインプットに対して成果の規模や質は妥当であったか

【投入資金が効率的に使われたか】		
<b>実際に事業で使った金額と種類</b>	合計 9,327,709 円 ※2023年4月末 推定値	事業費：9,272,709 円 （内訳 直接事業費：8,730,614 円 / 管理的経費：542,095円） ※上記事業費には、自己資金：1,528,254 円 を含む 評価関連経費： 55,000 円
事業費は行き場のない刑務所出所者のシェルター維持費や支援者の謝金に充て、インプットに対して、事業成果・質ともに妥当であった。		

## 特に社会課題解決に貢献したアウトカム

## 【アウトカム】

02 元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。

指標③ 支援を受けた人のうち、刑務所出所者等支援活動に参加した人の割合 | 目標値20% ⇒21% (10名)

03 支援を受けた刑務所出所者等が、(のわみ相談所の、又は出所者専用の) シェルターから自立する

## 【要因】

## ・自立状況

当事者が支援者として認定され、当法人と業務委託契約をしたのは1人だけだったが、そのほか9人の当事者がシェルター入居者の世話を焼いたり、リサイクルショップの店番をしたり、フードバンクの引き取りや配達運転手をしたり、料理などで自分の特技を生かしたり、のわみの便利屋で働いて自立した人もいた。この事業を通して、3年間で48名支援して、30名(62.5%)がアパートや住み込みの寮、施設に入りシェルターから自立した。

9名(18.8%)が再犯し、シェルターで生活しているのは現在5名である。

## ・自立がうまくいった要因

2022年3月からは、刑余者専用のアパートシェルターを契約し、支援開始時に「3ヶ月でシェルターから自立する誓約書」を交わし、当事者もいつまでもシェルターにいられるわけではないと自覚して生活していた。支援者も初めの1ヶ月は週5日接触し、生活や就労の支援を行った。接触も複数の支援者で対応し、伴走支援や同行支援を積極的に行った。2ヶ月目からは事務所にも来てもらうようにして、他の支援者とも交流してもらい、ここでの人間関係や生活になじんでもらうようにした。特にシェルターから自立し、アパートに入った後も継続して事務所に来るように促し、支援者の方からも週1回は訪問するようにした。それによって孤立を防ぎ、できる人にはボランティアもしてもらい、人間関係を深めるようにした。特に、シェルター入居後3ヶ月で自立するという誓約は、時間の制約があることから、支援者側も意識して支援に当たるようになり、再犯を考える暇がなく、9割は生活保護でアパート入居となったが、これは再犯防止や社会復帰に役に立ったと思う。自立を促すために、必要なものは全て買い揃え、足りないものがあれば、のわみのリサイクルで無料提供し、フードバンクで食料支援をすることで、アパートで不自由なく生活ができるようになり、再犯する必要がなく、社会復帰につながったと考えている。

## ・自立に結びつかなかったケースについて

当事者の中には共同生活に向いていて、シェルターの食堂の皿洗いや掃除やゴミ出しなどに関わるなど、人との関りを好む人もいるし、病気のため、いつ孤独死するかわからないので一人暮らしを拒む人もいた。また、お金の管理が苦手で、人の目が行き届かないと、自律的な生活が難しい人もいるので、アパート入居が必ずしもゴールではなく、みんなと一緒に助け合って生きていくことを選ぶ人もいた。

## 特に達成が困難であったアウトカム

### 【アウトカム】

01 帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、2度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。

指標③ 支援を受けた人の再犯率 | 目標値10% ⇒**18.8% (9人/48人)**

### 【課題の分析】

のわみサポートセンターの施設に来て再犯した人達は、のわみサポートセンターや愛知県一宮市に対して縁もゆかりも愛着もなく、地理も分からず、身内も知り合いもなく、本当は長く住み慣れた所（地元など）に帰りたかったのだが、そこには帰れる場所がなく、仕方なくのわみに来た人達だった。

中には、精神疾患や知的障害、認知症、愛着障害等で多動過ぎるなど、複雑で複合的な課題を抱えていて支援が困難な人もいた。慣れない土地で、再犯せずに生きていくには温かい支援の受け皿が必要だったが、コロナ禍の中では日中支援の十分な受け皿が用意できなかったため、再犯に至ったのではないかと考えられる。

のわみが支援している刑務所出所者のほとんどは、犯罪を繰り返して刑務所にも何度も入ってきた高齢者であるが、引き受けてくれる親族も知人もなく、高齢で就労困難であることから更生保護施設入所も難しく、社会での引受先がないまま満期釈放にまで至った人達である。のわみとしては、のわみが関わったすべての人に再犯せず生活して欲しいと考えて支援していることから、今回**10%**という目標値を設定し、それは達成できなかったものの、公的資料で示されている満期釈放者の再犯率と比べると低い数字となっていることから、のわみでの支援に一定の効果はあったと評価している。

### 【アウトカム】

同じく01から 指標④ 支援を受けた人のうち、気軽に何でも話せる友人ができたり、支援者と対話を続けている人の割合 | 目標値70% ⇒ **3年間平均53%**

### 【課題の分析】

支援を受けた人が、アパートに転居し、自立した後も、のわみとの関係を断ち切らずに関係を続けていくのは、コロナ禍では難しかった。

定期的で開催される当事者の会である「救生の会」に参加を呼び掛け、実際に会に参加してもらうことで、シェルター入所中も自立後も息の長い関係を維持してきていたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、事業期間中ほとんど開催できなかったため、刑務所出所者の人達に参加の呼びかけができず、人間関係が途切れてしまう要因となった。

## 5. 考察

### 事業全体を振り返っての考察

#### 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

- 当事者支援者となった山本氏と毎日支援の在り方について話し合いを重ね、刑余者に対する理解が深まった。（副次的効果）
- 刑余者の中には多動、被害妄想、気分障害、疑心暗鬼、人間不信、いたずらなど普通では考えられないことを考え、短絡的で思ったことをすぐに行動に移すので、なかなか理解するまでに時間がかかった。特に薬物依存の人は幻聴幻覚の症状が出るので、対応がとても難しかった。今後はさらに視野を広げ、事例検討を重ね、最悪の事態を想像しながらできる支援をしていきたい。（想定外）

#### 提言

- 相手の気持ちや状況に理解を示しつつ、他に方法はないのか、もっとできることはないのか、探求していく習慣ができた。今後もNPOとして従来にない新しい発想と試みで事業改善を行い、日々チャレンジをしていきたい。

#### 知見・教訓

- 帰住先のない、刑務所等出所者の住まいの確保は今後も必要であり、課題はあるが、ニーズがあり、常に1~2部屋刑余者の為に空室を確保する必要がある。事業設計として、まず一人一人の支援計画をしっかりと作る必要があり、孤立や孤独にならない為にも共同生活が必要な人もいて、共同生活が苦手な人もいて、知り合いが多くいて、アパートで独り暮らしがしたい人もいて、アパートで独り暮らしがしたい人と、共同生活がしたい人の支援をそれぞれする必要がある。
- 入居者間で争いがあったり、暴力性がある人は、できるだけ早く、次の行先を考える必要がある。また、刑余者は生活に必要な資源をあまり持っていないので、生活に必要なもの(住食衣)と居場所を提供することで、再犯防止につながると思います。
- 人との信頼関係を構築するのが苦手な刑余者には、支援者が常に刑余者の気持ちに寄り添った対応することで、信頼関係を構築することが必要である。
- 決して感情的にならず、冷静に刑余者と向き合い、理解し、受容・共感・傾聴し、足りないものを補い、手を差し伸べ、良かれと思うことを行動に移し、共に人生を歩む覚悟を持つ、日々の積み重ねでいつか信頼関係ができ、再犯防止、社会復帰ができると思います。

## 6. 結論

### 6-1 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
1. 課題やニーズの適切性					○
2. 課題やニーズに対する事業設計の整合性				○	
3. 事業実施のプロセス		○			
4. 事業成果の達成度		○			

### 6-2 事業実施の妥当性

上記のなかで重要と思われる点や特筆すべき点を根拠として、事業の妥当性についての考えを自由記載してください。

のわみが支援している刑務所出所者のほとんどは、犯罪を繰り返して刑務所にも何度も入ってきた高齢者であるが、引き受けてくれる親族も知人もなく、高齢で就労困難であることから更生保護施設入所も難しく、社会での引受先がないまま満期釈放にまで至った人達である。のわみで支援を行わない場合、こうした人達は住まいも仕事も、知り合いもできず、再犯に至る可能性が極めて高いとされている。よって、今回の事業の実施により、自立や再犯以外の選択肢をつくっていくことの妥当性は十分にあったと考えられる。

## 7. 資料

No.	内容	ページ数
1	事前評価時の短期アウトカム／最新の短期アウトカム	p.29
2	支援対象者へのアンケート <様式>	p.30～31
3	同上 <結果まとめ>	p.32

## 事前評価時の短期アウトカム（事業計画書より抜粋）

(2)短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値/目標状態	目標達成時期
1.帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、2度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。	①支援を受けた人のうち、その後「いきがいややりがい」を感じられるようになった人の割合 ②支援を受けた人のうち、経済的に自立した人の割合 ③支援を受けた人の再犯率 ④支援を受けた人のうち、「当事者会」に継続的に参加している人の割合 ⑤支援を受けた人のうち、刑務所出所者等支援活動に参加したいと感じた人の割合	①40% ②10% ③30% ④30% ⑤10%	①90% ②90%（生活保護、年金等も可、支援開始後3ヶ月時点、その後も見守り支援を継続） ③10% ④70% ⑤50%（当事者の見守り活動、個別の相談活動、各種ボランティア活動の参加も含む）	2023年1月
2.元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。	①元当事者の支援者のうち、支援をすることで「生きがいややりがい、使命感」を抱くようになった人の人数及びその事例 ②支援者となった元当事者の再犯率	①4人(事例) 1-1.7年前に刑務所を出所し、いろいろな人と関わるなかで帰住先のない人の受け入れがしたいと思っていた所2年前にのわみと出会い、支援者として活動することが可能になった。 1-2.2年前に出所後転々とし、1年半前にのわみに相談に行き、支援者として活動することになった。 1-3.1年前福島刑務所を出所する時、トライアゲインの存在を知り、世話になり、恩返しとして支援者になった。 1-4.半年前に出所し、世話になった恩返しとして料理の腕を生かして子ども食堂や各種イベントで料理人としてまた相談相手として活躍。	①支援者になった者のうち90%以上を目標とする。 ②0%	2023年1月

## 最新の短期アウトカム（事業計画書より抜粋）

(2)短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値/目標状態	目標達成時期
1.帰住先のない出所者は、出所後に様々な支援を受けることにより、住まいや仕事などの生活が安定し、自分が社会に受け入れられているという安心感と仲間達とのつながり感を得て、2度と再犯しようとは思わなくなる。また元当事者の支援する姿を見て、自分も支援活動に参加したくなる。	①継続的に支援を受けている人のうち、その後「いきがいややりがい」を感じられるようになった人の割合 ②継続的に支援を受けている人のうち、経済的に自立した人の割合 ③支援を受けた人の再犯率 ④支援を受けた人のうち、気軽に何でも話せる友人ができたり、支援者と対話を続けている人の割合	①40% ②10% ③30% ④30% ⑤10%	①90% ②90%（生活保護、年金等も可、支援開始後3ヶ月時点、その後も見守り支援を継続） ③10% ④70%	① 2023年3月 ② 2023年3月 ③ 2023年3月 ④ 2023年3月 ⑤ 2023年3月
2.元当事者が支援者として、出所者を支援する活動に参加する状態になることにより、生きがいややりがい、使命感を抱くようになり、再犯をしなくなる。	①元当事者の支援者のうち、支援をすることで「生きがいややりがい、使命感」を抱くようになった人の人数及びその事例 ②支援者となった元当事者の再犯率 ③支援を受けた人のうち、刑務所出所者等支援活動に参加した人の割合（短気アウトカム1から移転）	①4人(事例) ※事前評価時から変わらず省略 ②0人	①支援者になった者のうち90%以上を目標とする。 ②0% ③20%（主に同行支援だが、当事者の見守り活動、個別の相談活動、各種ボランティア活動の参加も含む）	① 2023年3月 ② 2023年3月
3.支援を受けた刑務所出所者等が、（のわみ相談所の、又は出所者専用の）シェルターから自立する	①支援を受けた刑務所出所者等のうち、実際にシェルターから自立できた（アパート等に転居した）人の数（転居先はのわみのシェルター・アパート以外） ②シェルターからアパート等への自立に至るまでの期間	①シェルターからの自立を意識した支援をしていない	①支援を受けた人の70% ②のわみの支援を開始してから3ヶ月から4ヶ月で自立できている	2023年1月
4.団体の組織基盤について、身寄りなく帰住先もない刑務所等出所者を継続して支援できるような、安定した状態になる	①非営利評価センターの「グッドガバナンス認証」の認証を得る	①認証なし	①事業終了時まで「グッドガバナンス認証」を得ている	2023年1月

当事者主体の再犯防止社会復帰支援事業<アンケート>ご協力をお願い

なまえ \_\_\_\_\_

## 【アンケートの目的】

・このアンケートは、のわみサポートセンターの支援を受けられたみなさまに、いまの生活のようすなどをお聞きすることで、これからの支援についてよりよい方法を探ることを目的としています。アンケートへの回答は自由です（ご協力いただける方だけ、ご回答ください）。

（あてはまるものに✓してください）

1 のわみサポートセンター(以下のわみ)から受けた支援に○をつけてください

- 住まい（シェルター）  家具家電の提供  生活必需品（食品・衣類等）の提供  
 就労先の紹介  通院のつきそい支援  生活保護の申請  金銭の貸与  
 困りごとの相談や支援  
 その他（ ）

2 現在、あなたは、のわみとどういった関わりをもっていますか。

- 自立しており、特に関わりを持っていない  
 自立しており、のわみの事業を手伝っている（事業名： ）  
 自立したが、支援を受けている  
 （受けている支援に○：生活支援・食料支援・相談支援・その他（ ））  
 シェルターに入居して、支援を受けている  
 （受けている支援に○：生活支援・食料支援・相談支援・その他（ ））  
 その他（ ）

3 のわみの支援を受けるまえの、あなたの生活は、どうでしたか。

- とてもよくなかった  あまりよくなかった  どちらでもない  
 まあ、よかった  とてもよかった

4 のわみの支援を受けたあとの、あなたの生活は、どうですか。

- とてもよい  まあ、よい  どちらでもない  
 あまりよくない  とてもよくない

5 のわみの支援を受けるまえ、「生きがい」や「やりがい」を感じていましたか？

- とても感じていた  まあ、感じていた  どちらでもない  
 あまり感じていなかった  まったく感じていなかった

6-1 のわみの支援を受けて、「生きがい」や「やりがい」を感じられるようになりましたか？

- とても感じている  まあ、感じている  どちらでもない  
 あまり感じていない  まったく感じていない

6-2 6-1で「とても感じている」「まあ感じている」と回答した方にお伺いします。

「生きがい」や「やりがい」をどうということから感じていますか。

7 のわみの支援を受けて経済的に自立できましたか。

- 年金と生活保護を受けて経済的に自立できた。  年金と就労で、経済的に自立できた。  
 就労のみで経済的に自立できた。  現在も、のわみの支援を受けている。  
 借金がある、お金のやりくりが難しい、 病院や薬代が大変  
 その他（ ） ※その他の方は具体的にお書きください。

8-1 のわみの支援は、犯罪をせずに生きていくために、役に立つと思いますか？

- とても役立つ  まあまあ役立つ  あまり役立たない  まったく役立たない

8-2 「とても役立つ、まあまあ役立つ」を選んだ人にお尋ねします。

のわみの支援のどういうところが、再犯防止に役立つ、と思いましたが、  
 住まいがあること、仕事を紹介してもらえたこと、いつでも相談できること、  
 何気ない話ができる人が周りにいて寂しくないこと、お金の不安が少なく生活できる  
 こと、役所の手続きなどに同行してもらえること、その他（ ）

9 のわみを通して、気軽に何でも話せる友人ができましたか？

- 友人ができた  
 支援者に相談している  
 支援者とは疎遠  孤立している  のわみを通じての友人はいない

10 のわみは当事者支援者を育成することで、その人が犯罪せずに生きていくことにつながると考えていますが、あなたは、同じような立場の人（刑務所を出た人）の支援をすることについて関心はありますか？

- 関心があり、支援者になりたい  関心はあるが、自信がない  
 関心がない  わからない。

11 現在お困りのこと、相談したいことはありますか。

ある \*さしつかえなければ、こまっていることに○をつけてください。

}
 住まい・仕事・病気・食事・お金・人づきあい・  
 相談できる人がいない・その他( )

ない

12 のわみの支援について、良かったところ、悪かったところ、直してほしいところなど、自由に思うところ（感想）を書いてください。

★最後にあなた自身のことについておうかがいします。

問5. あなたの年齢について、次のなかからあてはまるもの【1つ】に○をつけてください。

1) 20代	2) 30代	3) 40代	4) 50代	5) 60代	6) 70代	7) 80代以上
--------	--------	--------	--------	--------	--------	----------

問6. 現在、お仕事はありますか？

ある	ない
----	----

問7. 現在、一緒に暮らす人はいらっしゃいますか？

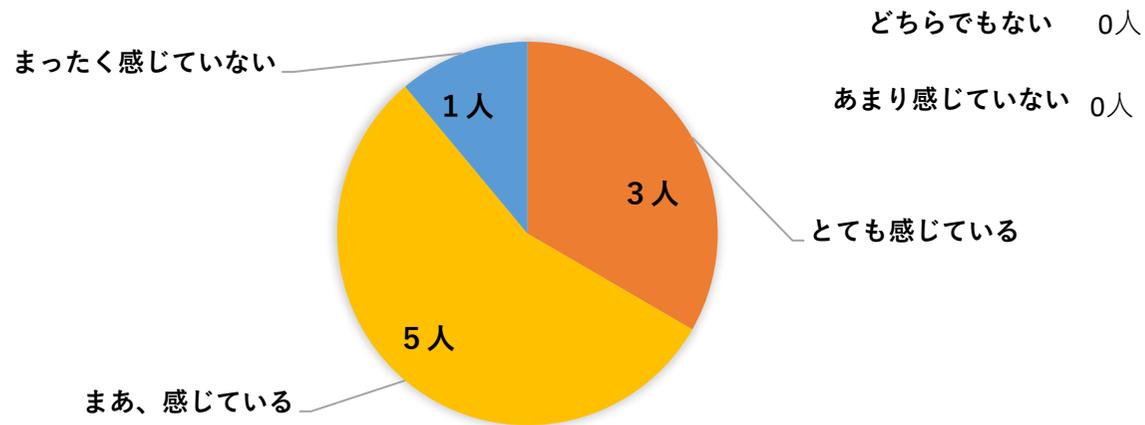
いる	いない
----	-----

★★これでアンケートはおわりです。お忙しい中、ご協力、ありがとうございました★★

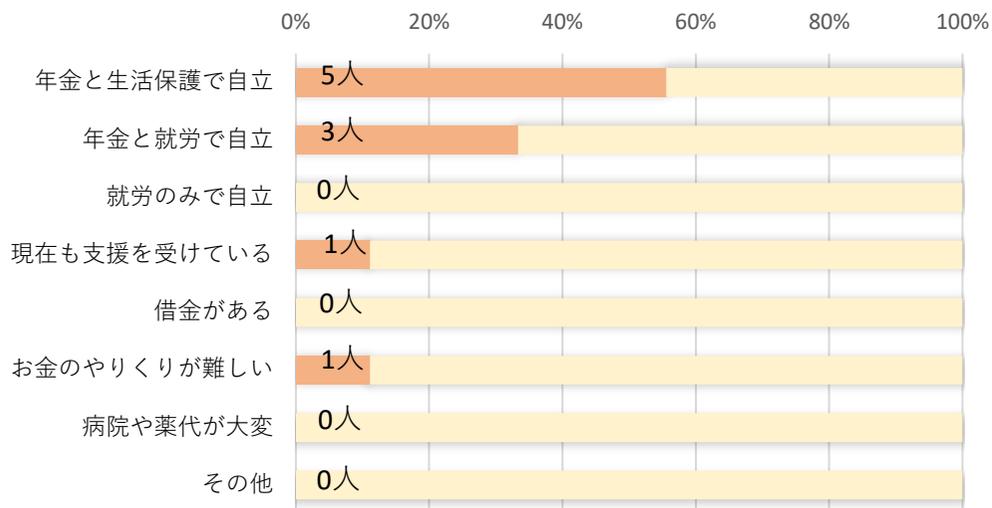
のわみサポートセンター スタッフ

## 支援対象者アンケート結果

支援を受け、「生きがい」や「やりがい」を感じられるようになりましたか



支援を受けて経済的に自立できた人の割合（9人中/複数回答可）



のわみを通して、気軽に何でも話せる友人ができた人の割合

（9人中/複数回答可）

